# 酉松会新聞

酉松会
一橋大学
ア式蹴球部
http://old2.josuikai.net/circle/soccer/


## 幻の一橋サッカー部応援歌

もう30年も前になる。大学の四年になっても将来何の仕事をしたいのか、わからなかった。サッカーとマージャンに明け暮れていたからね。仲間が次々と銀行、商社、メーカーに就職を決めていく中、迷い続けた。毎日ネクタイをしめ、毎日決められた時間に会社へ行かなきゃいけないような人生はイヤだった。できれば自分が好きなことを仕事にしたい。

当時の私はジャズが好きで、何となく、本当に何となく漠然と、音楽関係の仕事がしたいと思った。ジャズ評論家、レコード・ディレクター、ラジオの音楽番組のディレクターなど。とにかくジャズを本場で学びたい。ただそれだけの気持ちで、10年ぐらい独学で弾いていたギターを片手にアメリカへ渡った。

初めての海外への旅だった。日本語にも翻訳されているジャズの教本を書いた先生が、テネシー州の大学で講座を持っていることを知り、ロサンゼルスで英語を半年間勉強した後、昭和53年の1月に入学した。

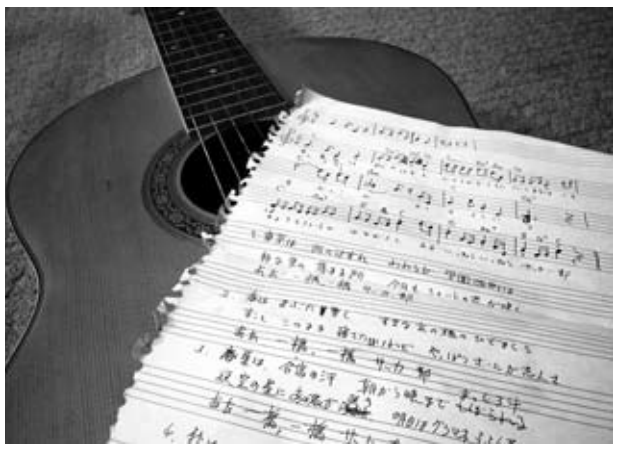
それから間もなくサッカー部の監督をしていた外岡さんから手紙が来た。応援歌を作ってくれという依頼だった。なぜ???その唐突さに驚きもしたが、素直だったから何とか作った。初めての外国生活、まだ友だちもいない、英語もよく話せない。多分さびしかったんだろう。応援歌というより、センチな青春歌になってしまった。その後、後輩たちが歌ったかどうかについて外岡さんは口を濁している。推して知るべし。

現在の私はフリーランスのディレクターとしてテレビの番組を作っている。音楽関係の仕事につくことはできなかったが、ネクタイもしめず、自分の好きな時間に仕事ができる人生を得た。オスカー・ピーターソン、カーメン・マックレェー、スティービー・ワンダー、綾戸智恵、桑田佳祐、井上陽水などのライブビデオや音楽番組も作ることができたから、留学も無駄ではなかったかな。

久しぶりに応援歌を書いた時のメモを引っ張り出し、ながめていたら、自分の進むべき道を探そうともがいていた当時を思い出し、なんだか甘酸っぱい気分になった。おそらく外岡さん以外には誰も歌ったことがないであろうこの応援歌を公表するのは勇気がいったが、まあいいや。どうぞ笑ってください。

1. 東京は西のはずれ
　われらが学園西町は
　粋な男の集まる所
　今日もシュートの花が咲く
　ああ、一橋（いっきょう）、一橋、サッカー部

2. 春はまぶた重く
　好きなあの娘のひざまくら
　ずっとこのまま寝てたいけれど
　やっぱりボールが恋人さ
　ああ、一橋、一橋、サッカー部



3. 夏は合宿の汗
　朝から晩まで真っ黒け
　夜空の星にあの娘が笑う
　明日はグラマネふとんむし
　ああ、一橋、一橋、サッカー部

4. 秋は心が騒ぐ
　今日から地獄のリーグ戦
　勝った負けたに泣き笑い
　四年の苦しさ切なさよ
　ああ、一橋、一橋、サッカー部

5. 生まれは違うけれど
　サッカー通じて集まって
　酒と女とマージャンと
　わが一生の良き仲間
　ああ、一橋、一橋、サッカー部

福本　浩（昭和52年卒）

## 3部に降格、来期の巻き返しに期待

### ― 東京2部リーグ戦 ―

平成19年度の東京都2部リーグは昨年9月に開幕、一橋は1勝5敗3分の勝点6で10校中9位となった。この結果、2部降格が決まり、来年度は東京都3部リーグでプレーすることになる。

今年度は最上級生が12人と戦力も充実、仕上がりも順調で、前年度あと一歩で及ばなかった1部復帰を目指し、中島聡太主将のもとリーグ戦に臨んだ。

しかし初戦の対明治学院戦で開始直後にGKが退場、10人で戦うことになり1対4と敗退した。スタートのつまずきが後を引くことはなかったものの、決定力不足もあって波に乗れず、2戦、3戦は無得点で引き分けと敗戦に終わった。

第4戦にようやく攻撃陣の頑張りで5対1と快勝したが、5戦、6戦はつきにも見放された。7戦、8戦も最後のダメ押しができず、結果は痛い引き分け。10月28日、最終戦の対東大は力尽きて敗れた。

試合メンバーはもちろんベンチメンバー、マネージャーの現役全員、それにOBにとっても残念な結果になったが、今年度に向けての課題も浮き彫りになっている。中島主将は「悔しく、情けないが、全ての部員が多くのことを学んだと思う」と語る。つらい今シーズンの経験をばねにした全部員一丸となった巻き返しに期待したい。

**平成19年度　東京都大学リーグ2部戦績表**

| チーム | 立教 | 学習院 | 明学 | 成城 | 東大 | 上智 | 日大生 | 創価 | 一橋 | 日大商 | 勝点 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 立教 | ― | 3○2 | 3○2 | 0●1 | 2○1 | 6○2 | 2○1 | 2○0 | 2○0 | 6○0 | 24 |
| 学習院 | 2●3 | ― | 1○0 | 3○0 | 2○1 | 3○2 | 1○0 | 0△0 | 1△1 | 4○1 | 20 |
| 明学 | 2●3 | 0●1 | ― | 4○2 | 3○1 | 0●1 | 5○1 | 3○0 | 4○1 | 1○0 | 18 |
| 成城 | 1○0 | 0●3 | 2●4 | ― | 1△1 | 2○1 | 1●3 | 3○1 | 0△0 | 3○1 | 14 |
| 東大 | 1●2 | 1●2 | 1●3 | 1△1 | ― | 0●1 | 2○1 | 3○2 | 2○0 | 4○1 | 13 |
| 上智 | 2●6 | 2●3 | 1○0 | 1●2 | 1○0 | ― | 5○4 | 2●3 | 3△3 | 3○0 | 13 |
| 日大生 | 1●2 | 0●1 | 1●5 | 3○1 | 1●2 | 4●5 | ― | 3○2 | 2○0 | 6○2 | 12 |
| 創価 | 0●2 | 0△0 | 0●3 | 1●3 | 2●3 | 3○2 | 2●3 | ― | 1○0 | 4○0 | 10 |
| 一橋 | 0●2 | 1△1 | 1●4 | 0△0 | 0●2 | 3△3 | 0●2 | 0●1 | ― | 5○1 | 6 |
| 日大商 | 0●6 | 1●4 | 0●1 | 1●3 | 1●4 | 0●3 | 2●6 | 0●4 | 1●5 | ― | 0 |

日大生：日大生物資源科学部　　日大商：日大商学部

## 東京商大サッカー部美男子銘々伝

正月の五日に、昨年暮に亡くなった青木育郎さんの葬儀に参列した。青木さんとは予科同期の土屋五郎さん、予科は1組同クラスで、勤務先も三菱商事と同じ前川一郎さん（ボート部）、それに後輩の中路君（昭和32年卒）らと葬儀の後、火葬が終わるまで、控え室で青木さんを偲び、予科時代の楽しい思い出を話し合った。

青木さんは好男子であり、楽しい話術で食堂の女の子をからかって、笑わしていたのをよく見た。戒名に「諧温」の二字があったが、よく人となりを表していた。

「土屋ごろちゃん」は、浦和中学出身のアポロのような美青年であった。昭和17年サッカー部が2部に落ちて、瀬藤新主将が可愛い顔に似ず阿修羅のごとく率先垂範の猛練習をやった。ごろちゃんはセンター・フォワードとして、得意の技を振るった。その足技は当時としては不思議なもので、球を相手の頭上を飛び越さして抜くとか、ボールをキープして相手に渡さないなどの高級技術を自分で編み出していた。

昭和18年の大学リーグ戦は、戦争のため春に行われて、相手のチーム数も減り3戦全勝で優勝して一部に昇格した。学部の三年、二年と予科三年、二年の混成チーム。青木さんが体調を崩したので、おかげで私のような走りしか能のない男もフォワードに起用された。

私が昭和16年に予科に入った時のセンター・フォワードは広島一中出身の片山光夫さんであった。この人は男性的美男子で「チャング」と呼ばれていた。チャングとはライオンのことだといわれたが、彼を見に来る女学生がいるということだった。

後輩で思い浮かぶのは、橋本昭一君（昭和31年卒）だけだが、中々の美男子で、S・O・I（サッカーOBインターハイ）のメンバーとしても活躍した。

奥村　一郎（昭和21年卒）

## サッカーは、財産

ドイツ・ニュールンベルク。この地で初めて念願のワールドカップの日本戦を見ることができた。日本対クロアチア。結果は、ご存知のように0対0で引き分け。柳沢が決定的なチャンスをはずしたとして非難の嵐を浴びた試合だ。私が座った席は、ちょうどこの柳沢のプレイが目の前で見える席。右からゴール前にパスが入って来て、あ、絶好のチャンスと立ち上がった瞬間、柳沢が蹴ったボールは信じられない角度でゴールポストのはるか右に戻るように飛んでいた。

何故、あんなところにボールが飛ぶのか、目の前で見ていてもまったく信じられなかった。しかし、この時、柳沢は右のアウトサイドでキックしていたのだ。私はインサイドで蹴ったとばかり思っていた。そうだったのか。それを知って私はこう思った。柳沢は何も弁解しないけれども、瞬間的にこう考えたのではないか。ともかく一瞬でも早くボールタッチしたい、一瞬でも早くと。そのためにアウトサイドでキックした。

それが結果的に激しい批判を浴びることになる。しかし、日本の選手のペナルティエリア内でのボールタッチの遅さは、何度も指摘される欠点だ。そのためにシュートチャンスを失うケースが多い。そう考えると、中学からずっとフォワードだった私は、今でも少し柳沢を弁護したくなる。

サッカーとはかくも、一瞬一瞬が面白さに満ちている。何年経っても、忘れられないシーンがいくつもある。それは貴重な財産とも言えるものではないだろうか。

日本・小平。このグラウンドを、現役の応援のために訪れると、すぐに四十年も前の、青春のあの時代に帰ったような気になる。グラウンドの角度は九十度変わったが、あの土の色や、まわりの林の雰囲気は変わっていない。

ああ、ここで「十七秒四十三秒」の特訓をやったなあ、グラウンドにツバを吐くと怒られたなあ、と、それこそひとつひとつのシーンがページをめくるように、現れて来る。　現役諸君には、何十年先にも残る貴重な財産を、ここでいくつもつくって欲しいものだと、切に願う。

土井　徳秋（会長、昭和45年卒）

# 戦いを終えて

## 今シーズンをばねにして

手が届きそうで手を伸ばして、いざつかんだと思えば、砂がすり抜けていくかのようにして消え、気づけばもうあんなにも遠くへと離れていた。

最後の年にして、1勝することの難しさを、実感をもって知った。僕が1年の時にも、秋季なかなかうまくいかず、先輩たちが苦渋の表情を浮かべていたのを覚えている。しかし、当時自分の力の無さのみを感じ、ことの本質が見えていなかったのだと、3年後の今、気づかされてしまった。

振り返ってみても、この1年は試合以外の面においても、いいところまでいくが、すんでのところで、ころっと状況が変わり、結果が伴わないなんてことはしょっちゅうであった。なんとも苦しい1年であったが、そんな中でも同期は嫌な顔ひとつせず、お互いを支え合い、よく助けあえた。秋季で1勝3分5敗という屈辱的な結果が出たために、今はゆっくりと自分の時間を過ごしてはいるものの、僕たち同期は間違いなく、昨年味わった苦しい経験を懐かしく思いながら、話し合うに違いない。

勝負事に勝ち負けはつきもの、昨年のように降格する年も、3年前のように昇格する年もある。終わった身であるので、このように無責任な態度をとらざるを得ないが、正直なところ悔しい。何がいけなかったのか、どこで間違えたのか。何度も思い返す。そのたびに、情けなく思う。しかし、このつらいシーズンを潜り抜けたすべての部員は、多くを学んだのではないかと思う。だからこそ期待したい、僕たち反面教師を見た後輩たちの活躍を。

中島　聡太（主将、4年）

## 「決定力」をどうつける

10月28日　対東大戦　前半を折り返して0対1の状況。ハーフタイムには、悲壮感がただよっていました。「シュートまでいくことができない」。後半は、まずこの状況を打開することが至上命題でした。しかし、後半も中盤に差し迫ったころ、さらに1点を叩きこまれ、そのまま試合は終了した。

思えば、秋季リーグは「決定力」の無さを浮き彫りにするものでした。9試合通じて、10得点とリーグで9番目の結果に終わりました。失点が16点と、リーグでも6番目の失点であったことを考えると、「決定力」の無さがうかがえるのではないかと思います。

「決定力」という課題に対しては、個人練習でも取り組んでいました。しかし結果的に、1年通して成果というものは思うように出せなかった。特に、チャンスが少ない中で決定的なシュートを外していた試合が、他のチームよりも多かったのではないかと思います。

「決定力」を培えなかった理由は、練習試合での成功体験の無さだと個人的には思っています。練習試合でも、2部リーグ以上のチームとの試合が多く、成功体験、つまりは試合中に「得点」を確実に決めるという練習が十分に行えなかったかもしれません。来期は、得点源であったFWの中島が抜けます。これを考えたときに、上記の課題に真摯に取り組む必要性があるのではないかと思います。

最後に、秋季大会とは別に土曜日に行われていた、Bチーム中心の練習試合の結果について報告します。昨年は、計8試合で、17得点35失点と全体としては満足行く結果とはいえませんでした。しかしながら、対東大戦前日の日大文理では、今後の「希望」を見出すことができました。今まで、大量失点で負け続きのBチームが、4対2で勝利を収めたのです。得点者は、1～3年のメンバー。そして、何度もピンチを防いだのは、まだ秋季という舞台にたっていないDFの小林悠二（2年）でした。来年の秋季大会では、このときのメンバーが主力になるでしょう。格上の日大文理を破ることのできた、下級生には今後大いに期待を持つことができるでしょう。

木村　辰徳（4年）

# 土壇場でみえた課題

第7節を終えて、一橋の順位は8位で勝ち点は5、9位の創価は勝ち点が4、その差は1しかありませんでした。そのため、降格を避けるためには、次の試合で勝つことが求められていたのです。私たちが、この事実を受け止めながら、「絶対に降格したくない」「絶対に勝つんだ」という意気込みで臨んだのが、第8節の学習院戦でした。

実際に試合が始まってみると、その気迫はスターティングメンバーをはじめ、チーム全体にみなぎっていました。序盤は押し込まれ、何度かの危ないシーンもディフェンスを中心に集中して凌ぎ切りました。その後、中盤あたりから流れを取り戻していきました。ただ、流れの良いときに点を決めることができないのが今期の悪い点であり、逆に前半の終盤には、相手にコーナーキックからの得点を許してしまいました。

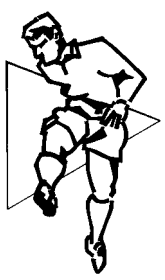
失点はしたものの、ハーフタイムのベンチには、「試合のペースをつかめている」という自信と、「絶対に勝とう」という気迫がありました。後半、選手の動きは良く、一橋のペースでした。そのなかで、中島が得点し、逆転に向けての期待が生まれました。高田のミドルシュートがバーを叩くなど、惜しい場面も何度かあったのですが、結局、追加点は奪えず、引き分けでした。「あと少し頑張れば」という思いが多くの部員にありました。

この学習院戦を振り返ってみると、中盤での競り合い、最終ラインでの守備、ボール回しからシュートまでいった攻撃と、この秋季のなかでは、かなり良かったと思っています。しかし、良いゲームができても勝てなければ意味がなく、その点が今年のチームでは課題でした。

私たちの学年は最後までこの課題を克服できませんでしたが、この経験を来年以降も残る部員たちがしっかりと記憶して、次のステップに進むために活かしてもらいたいと思っています。

影山　昇（4年）

# あの一瞬から学んだこと



秋季開幕戦は一生忘れられない試合となった。

秋季直前からチームはいい方向に向かい始め、この調子なら1部昇格できるのではないかと考えていた。そのために初戦に勝って勢いをつけることが大事であり、相手は格上だったが、普段通りの力を出せば絶対に勝てるとも思っていた。

しかし、その大事な試合、開始15秒で自分がバックパスをミスしたことをきっかけにGK桜井が退場となった。

その瞬間、頭が真っ白になり、何が起こったのかよくわからなかった。試合中、退場した桜井と控えGKと交代したFW斉藤が泣いている姿を見ながらプレーするのはつらかった。このまま試合に出続けていいのかと思った。しかし、自分にできることは目の前の試合を精一杯戦うことしかなかった。逃げることは許されなかった。

周りは自分を支えてくれた。桜井が退場した直後「一人ひとりが1.1倍走ればいい」とフォローしてくれた鄭と中島。初戦以降も自分を信頼し、使ってくれたGMの木村。試合中、常に声を出し、チームを鼓舞した佐藤には勇気をもらった。一番支えられたのは桜井の練習姿勢。初戦の退場を境に出場機会を失った桜井はその後の練習でも誰よりも声を出し、自分の出番を信じて懸命に練習に取り組んでいた。

しかし、自分はチームに何も貢献することができなかった。怪我で第5節以降の試合を欠場し、秋季を終えてしまった。3部に降格が決まった時は本当に申し訳ない思いでいっぱいだった。

秋季が終わって1ヶ月以上が経過し、冷静になって振り返ってみても、とても「悔い」が残る大学最後の秋季リーグだった。しかし、大学でのサッカー生活を共にした同学年から多くのものをもらったし、彼らのおかげで人間的に成長できたと思う。本当に感謝している。自分の人生の中でこの秋季リーグは絶対に忘れられない。

浅沼　雄介（4年）

# よみがえるレッドカード

「ピィィー！！」という甲高いホイッスルの音と駆け足で走り寄ってくるレフェリーを見て我に返った。そして自分に突きつけられるレッドカード。サッカー人生で一度ももらったことのないこのカードを前にどうしていいかわからず、ただ呆然とピッチを去ったことだけ憶えている。

時は9月2日、秋季リーグ開幕戦。相手は明治学院大学。チームは夏合宿を始めとした苦しい夏を乗り越え、フィジカル的にもメンタル的にも最高潮で、スタメンもベンチの応援もマネージャーも全員が一丸となり戦う準備はできていたように思う。もちろん自分も調子は最高でやれる自信はあった。

しかし不思議なことに、調子のいいときほど思ってもいない出来事が起こるものだ。試合開始早々、バックパスのミスが相手FWに拾われて1対1の状況。正直自分はこのときのことを憶えていない。ただ、ここで点を取られるのだけは避けなければと思った次の瞬間ペナルティーエリアを飛び出していた。その後は最初に書いた通りである。

ピッチを出た後も、しばらくは何も考えられなかった。しかし、GMの木村と赤星監督に「おまえは悪くないぞ」と言葉をかけられた時には、涙が溢れて止まらなかった。自分が退場したことで交代せざるをえなかったメンバーと残り10人で戦わなければならなかったチームに迷惑をかけてしまったことへの後悔と、チームのためにプレーできなくなった悔しさでいっぱいだった。もし、あの時・・・していなければ、もし、あの時・・といった空しい想いが頭の中を回っていたように思う。

試合は結局1対4で敗れ、秋季のスタートダッシュに失敗してしまった。それでも、必死に戦ってくれたスタメンの選手と試合が終わる最後の最後まで声を出して応援し続けてくれた応援団のみんなの姿、そしてチームメイト全員で取った意地の1点はサッカー部を引退した今になっても大切な思い出であり宝物であって、それはこれから先もずっと変わらないだろう。

桜井　基貴（4年）

# 仲間がいて自分がいる

今季の部活を振り返ってみると、楽しかった思い出しか浮かんできません。確かに苦しいことや辛いこともたくさんありましたが、それもいい思い出の一部になっているような気がします。天皇杯や春季リーグ、そして新しい仲間を迎えて、三商大戦、夏合宿、秋季リーグ。どれをとってもマネージャーの中で楽しかったこと、その当時にみんなで笑った話題などが私の心の中に残っています。

3年間マネージャーという立場で部活をやり遂げることができたのは、マネージャーの仲間がいたからといっても過言ではありません。マネージャーのOGの皆様も何度もなぜ自分がこの部活に所属しているのか、自分のなすべきことは何か、迷ったことがあるのではないでしょうか。そんなときに、自分とサッカー部を繋ぎとめるものはマネージャーの仲間たちとプレーヤーの雰囲気だったような気がします。特に同じ学年のマネージャーの2人には感謝の気持ちを伝え切れません。一緒に笑って一緒に悩んで、お互い信頼できる仲間ができたことは一生の宝物になりました。

今季の成績は悔しいものでしたが、この1年で得たものはたくさんあると思います。テーピングの練習やシフトの組み方など、私たちも部活を良くしようと必死で努めてきました。プレーヤーのみんなもマネージャーの力を感じてくれていたらいいなと思っています。そして、マネージャー自身ももっと部活を楽しんでほしいと思っています。

西松会の皆様も、ご支援やご声援ありがとうございました。

大竹　惟（3年・マネージャー）

# OB観戦記

## 置き去りにされているもの

私が大学に入学した年から数えて、昨年がちょうど20シーズン目でした。この間、昇格5回、旧制度でのプレーオフ進出2回、降格6回を経験しています。一度の4部降格を除いて2～3部間の動きであり、この往復を長きにわたって繰り返しているのが実情です。

学生数がさほど多くない大学の、総じて平凡な高校出身選手の集まりである我々が持つ平均的な実力を表していると言えばそれまでですが、1部に昇格し定着できる程度のチーム力をつけることは極めて難しいことなのでしょうか。

以下は5年ほど前にコラム風に書いた文章です。

『川崎フロンターレユースの試合。中央最前部で観客も少ないが、トラックのある等々カスタジアムでは聞こえにくい部分もある。それでも色んな声が聞こえる。

まず「ターン！」という声は頻繁に聞こえる。しかし、彼らにとってそれは「フリーである」ことを意味するのではないようだ。1～2mの距離でDFが構えていても、少し離れたところから全力で寄せてくる敵がいても、「ターン！」という声がかかる。そう、彼らの間でこの言葉は「前を向けばチャンスが広がる（可能性がある）ぞ」という意味合いで使われている。「ワンタッチで振り向け」そうすれば「飛び込んでくる相手をかわせる」といっても良いだろう。

逆に「マノン！」の声は意外に少ない。察するに、常に敵がいることを意識付けられているのだろう。「フリー！」という声もほとんど聞こえなかったが、これは言われなくても当然わかるということか。

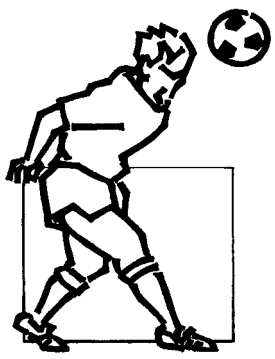
もうひとつに「ダイレクト（ダイレ）！」は多い。パス回し、ポストプレー、センタリングなどあらゆる場面で使われていた。ダイレクトでなければ、敵に詰められてしまう、オフサイドになってしまう、ゴール前で合わせられない、のは当然よくある事である。

声を出さないのは論外として、このツールをいかに効果的に使うか。同じ「ターン」という言葉であっても、意味を取り違えるようであれば欠陥品だし、単に〝どフリー〟を指すなら不要な飾りものに過ぎない。

以前、耳の不自由な方のバレーボールを見て、手はもちろん全身さらに表情まで使ってコミュニケーションをとるプレーぶりに感銘を受けた記憶がある。とても真似のできないゼスチャーの威力と声のありがたさ（重要性）がそこにあった。使えるのに使わないとしたら、もったいないを通りこして不遜としか言いようがないのかもしれない。』

「カズ！カズ！カズ！」といった具合にボール保持者の名前を連呼するばかりのチームをレベルが高いと感じることはないでしょう。この〝声〟以外にも、やれば出来ることで置き去りにされているポイントはいくつもあると思います。2～3部レベルなのは技術・戦術だけではないのかもしれません。

赤星　真一（監督、平成4年卒）



## 得点力のアップを

住まいの荻窪から小平グランドまで車で小1時間という近距離にも恵まれ、現役の試合や練習にはしばしば顔を出している。そうした経緯もあってか、リーグ観戦記を依頼された。昨年は降格のシーズンで気の重いテーマだが、観ていないOBも多いので、迷文を省みずお引き受けした。

緒戦の明学戦は、キックオフ直後GKが痛恨のレッドカード一発退場となり、90分を10人で戦うハンデもあって1対4と大きく躓いた。成城戦は0対0、日大生資戦は0対2と連続無得点で勝星を逃した。漸く4戦の日大商戦で持ち前の前線中央ポイントからの展開や左右のサイド攻撃が実って、5対1と快勝して溜飲を下げた。

この後勝運に乗りたいところであったが、トップの立教とは0対2と雨中守備が踏ん張り切れず、いよいよ崖っ淵天王山ともいうべき6戦の創価戦を迎えた。というのも全敗の日大商は最下位10位が確定だが、2チーム降格となる9位争いを脱するには当面のライバルを叩かなければならなかったからである。しかし勝負は相手の放ったミドルシュートがイレギュラーしGKの手を掠め、ネットを揺らし0対1と運命の一戦を失った。その後の2戦も勝点3を挙げるべく善戦したが、上智戦は3対3、学習院戦1対1の歯痒い引き分けに終わり勝ち切れなかった。最終戦は前年の雪辱を期す東大に0対2と気合負けした。

以上の結果1勝5敗3分勝点6　9位で3部に降格した。戦績を分析すると得点10、失点16、得失点差マイナス6、無得点試合5、無失点試合1という結果であった。

因みに念願の1部昇格も夢ではなかった前年の戦績は次の通りであった。5勝2敗2分勝点17で4位、得点16、失点11、得失点差プラス5、無得点試合2、無失点試合1。

両年度を比較すると昨年度はテクニカル・フィジカル能力共に前年度より下振れし、メンタル面の強さや作戦面の内容も及ばなかったようだ。

特に目立つのは得点力の低下である。これを立て直さないと3部の今シーズンも苦戦を免れないだろう。したがってリーグ開幕前までに　①セットプレイ（コーナー含む）で1試合1得点する練習　②DF・MFが前線へロングフィードするキック練習③基本技（シュート・キック・ドリブル・フェイント・ヘディング・カット他）の基礎練習、など戦術構成の素となる個人技の速く、強く、正確な能力向上を狙いとしてGM・監督が練習メニューに取り入れることを希望する。

大正10年創部、今年87周年を迎える本学ア式蹴球部も昇格・降格を繰り返してきたが、一貫して掲げてきた合言葉は「勝利への努力」であった。これなくしては成功の喜び・達成感、失敗の心の支えが得られないからである。これは漫然とではなく目標を持った練習や実戦なのである。

今年は四年生が大量12人も部を去るので戦力レベルの維持・向上が厳しくなるが、上がるために下がったのだと割り切って捲土重来2部復帰を期待している。

私もこれまで同様差し入れを持って小平に足を運び、20歳前後の男女部員の若返りオーラを貰いながら応援しようと思っている。OBの皆さんも大変貌を遂げた小平国際交流キャンパスの見物かたがた現役の応援に行かれたら如何ですか。

志摩　憲一（昭和31年卒）

## 試合運びに工夫を

昨年度は春のシーズンに数試合とリーグ戦7試合を応援に行きましたが、記録を取っている訳でもなく、また技術的なことを云々する立場でもないので、観戦を通じて感じたことを以下記させて貰います。

1．結果を見ていろいろ言われる方も居られると思いますが、サッカーの日本全体のレベルと同じで過去と比べれば現役の技術レベルは間違いなく上がっている。

しかし周りも上がっているため苦戦を強いられた訳ですが、絶対的に勝てない相手がいるのでもなければ、結果として勝った相手より力が上かと言えばそうでもない。要はチーム全体の調子、決められる時に決められたか、無駄なミスを防げなかったか?の結果だと考えると今期の課題もはっきりして来るのではないかと思う。

2．昨年度は連盟として人工芝での試合を優先するだったとかで、例年に比べれば小平での試合が少なかった。小平では1勝2分け、アウェーでは1分け5敗だったことから感じることは、人工芝というよりもグラウンドの大きさの影響ではなかったかと思う。

小平は縦が短く、横が狭いので攻撃では縦に急ぎ過ぎ外のオープンスペースが活用できないため、攻撃が単調になり、なかなか決定的チャンスが作れない。一方守備の面では外に振られた場合の対応がまずく失点したケースが多かった。

グランドを変える訳にはいかないので、常日頃からオープンスペースの活用と対応を意識して練習する必要があると感じる。

3．昔と異なりチーム数が増えリーグ戦の試合数が増えたため、メンバーの層が厚くないと勝ち抜けなくなっている。そのため交代を有効に使う必要もでてきているのだろうが、全体の流れ、局面の中で何故あるプレーヤーを途中で替えてしまうのか、と感じることがあるのは小生の不明のためだろうか。

4．試合後に他の人たちとの話の中で出てくるのは、スピードを上げるため、ダイレクトなプレーが多いのは結構なことだが、中盤で試合を組み立て、試合運びを落ち着かせるという意識をもっと持ったプレーがあっても良いのではとの感想である。これも外野席的感想かも知れないが、現役に検討して欲しい点である。

5．ところで、最近の試合を見に行って嬉しく感じるのは、ここ数年に卒業した若いOBが多数試合の応援に来てくれている事で、現役とOBの絆を強めるためにも望ましいことであり、西松会の今後の発展のためにも彼ら若い世代の活躍を祈りたいと思う。

清水　征四郎（昭和41年卒）

## 全員参加の意識

まだ残暑の厳しい9月、秋季リーグが開幕しました。私は開幕戦を含め、合計3試合観戦に行きましたが、一年前に自分がこのピッチに立っていたと思うと、時の流れの早さを感じるとともに、とても懐かしい気持ちになりました。そして、広いピッチ上を最後まで決して諦めることなく、全力で走っている現役のプレーする姿を見て、気付くと勝手に現役の応援団に混じり、一緒に大声で応援してしまっている自分がいました。

観戦していて感じたことは、「チームとは?」を、もう一度現役の皆に考えて欲しいということです。決して、試合に出ているメンバーだけが戦っているわけではありません。ベンチ外のメンバー、マネージャーを含めて、全員で戦っているのです。

今年のチームはそのような全員の意識統一が少し弱かったのかなと感じました。確かにチームの中でピッチ上に立てるのは11人であり、ベンチに入れるのは18人しかいません。しかし、各人が試合まではメンバーに選ばれるために最大限の努力をし、試合では自分に与えられた役割をチームの勝利のために果たすことができる、そんなチームが勝利を手にすることができるのだと思います。来期は是非とも、そんなチームになってくれればと思います。

とにもかくにも、秋季リーグ、また4年間を戦い抜いた現役4年生に対して、ご苦労さんの言葉を捧げたいと思います。私自身、3年間苦楽を共にした思い入れ深い学年でもあり、この1年間で最上学年として責任感のある顔になっており、とても頼もしく思えました。確かに昨年は結果がついてこなかったかもしれないですが、喜び、悲しみ、悔しさ、楽しさ、多くの経験をしながら4年間を戦い抜いたことに自信を持ってもらいたいと思います。

また来年も必ず観に行き、声を枯らして応援したいと思っています。これを読んで頂いているOBの皆様、是非ピッチに足を運んで頂き、一緒に応援しましょう！

全　博聖（平成19年卒）

# ヨハネスブルクで待っています

2010年にサッカーW杯の開催される(予定の)南アフリカ共和国。駐在(ジェトロ勤務)を言い渡された時にはさぞかしサッカー三昧の生活が待っているかと思いきや、いざ来てみればサッカーは黒人、ラグビーとクリケットは白人のスポーツとのこと。当地の白人はほとんどサッカーなど観ませんし、あまりやりません。

先日開催されたラグビーW杯で南アは優勝しましたが、決勝戦の日だけは黒人も白人も一緒になって盛り上がりました。サッカーW杯の時はさぞかし盛り上がるだろうねと南ア人に話すと、南アはサッカーは弱いからすぐ負けちゃうんじゃないかとのこと。さらに治安や停電が心配。盛り上がりはどうもいまいちの様子。

さて、こんな南アフリカで黄色人種である日本人は何をやっているのかというと、高地（標高1700m）で球が良く飛ぶことで有名なヨハネスブルクでは日本人はとにかくゴルフ。そして、次に多いのがテニス。ゴルフもテニスも苦手な私は、僅かながらいる日本人サッカー経験者を集め、イギリスやドイツなどの外交団チームや、はたまた野原で裸足の黒人たちを相手に毎週サッカーをやっています。黒人たちの中には、エトー（カメルーン代表）のようなスピードのあるものもいれば、視野が広く展開の上手なオリセー（ナイジェリア代表）のようなプレーヤーもおり、まさにそのプレーは個性的。個性的である半面、組織力には劣るので、日本人チームとはいつも互角の試合になりなかなか楽しい。

また、南アフリカはサーフィンのメッカであり、世界中のサーファー憧れの地。ヨハネスブルクから車で片道6時間をかけてインド洋のダーバンまでかけることしばしば。腕前はいまいちだが世界最高の波を堪能しています。〈写真〉

世界一の晴天率を誇る南アフリカはスポーツ天国。皆様も是非遊びに来てください。

佐藤　丈治（平成13年卒）

# 際立つ広島勢の存在感

練習中に「おどりゃー」などとどやしつけられ、一瞬ギクッとしたことがある。当時から部員にはサッカー王国・広島出身者が多かった。

現在酉松会の会員は450人に達するが、高校をもとに都道府県出身地を調べてみると東京が3分の1強を占め、神奈川が1割弱と続く。東京の大学だから当然だが、3位はなんと8％強の広島である。広島弁が幅を利かせていたわけである。

4位は埼玉、5位に兵庫とサッカーの盛んな地域が顔をだす。以下愛知、静岡、千葉、何ゆえか富山となる。逆に会員ゼロの地域は沖縄、宮崎、愛媛、徳島、秋田と西日本が多い。

高校別に見ると浦和高がトップ。先日、酉松会のある会合で、中堅OBがいずれも浦和高と聞いて、昭和40年前後は数えるほどにしかいなかったはずなのにと首をひねったことがある。それもそのはず、浦和の大部分は昭和50年以降なのだ。続いて東京の西高、立川高が肩を並べる。大学に近い都立高だからだろう。そして、またもや広島の広大附属高となる。

次が富山中部高。この高校も昭和50年以降の新興勢力だ。

一橋のサッカーは5割強を占める首都圏出身者をベースに広島、兵庫、そして近年では愛知、富山が加わり形成されたと言えるかもしれない(意味があるかどうかは分からないが)。

# 卒業30周年には全員集合を

昭和54年卒業メンバーの名簿を引っ張り出して眺めてみる。マネージャーのイモケンを含め13名の同期の面々だ。卒業20周年は石川県片山津温泉に、卒業25周年は諏訪湖畔に集結した（25周年には外岡大先輩にも参加いただいた）。次は09年の30周年で確か幹事はイモケン。

現在海外在住者は①高野（プラハ）、イモケンこと②佐藤博子（ロンドン）、③小生(米国中西部)の3名。④野村（バンコク）と⑤大西（トリポリ、ジャカルタ）はそれぞれ海外駐在を終えて東京勤務。⑥高槌と⑦加藤は国内どさ回りの後、それぞれ関東圏に落ち着いている。⑧石川も在京なので、この在京、関東組の5人とは一時帰国時にたまに会える。キャプテン⑨小池は長野県諏訪で引き籠もり(でも昨年11月の東大戦では活躍したそうな)、⑩寺西は地元石川県の高校で英語教師、⑪五座は長年名古屋地区暮らし、⑫五味（勉強好きで5年在学していたので正確には55年卒）は仙台あたりでごろを巻いている様だ。これで12名だが、山口で家業を継いでいたグラマネ ⑬山原が05年9月11日に早世したことは痛恨の極み。憲子夫人（通称キノリ）が事業を引き継ぎ、4人の子供達も立派に成長していることがせめてもの救いだ。30周年には元気に全員揃い踏みといきたいものだ。

さて、小生は現在インディー500で知られているインディアナポリスの南のコロンバスという小さな街（人口約4万人）で暮らしている（三菱商事勤務）。自動車部品関係を主体に日系企業が大小18社進出しており、家族を含め約400名の邦人が住んでいる。

治安が良くインフラも整った小奇麗で典型的な米国中西部の街だ。中西部はフラットで、行けども行けどもトウモロコシと大豆畑が続く。東海岸や西海岸の大都市とは全く違って、のんびり豊かなこれが本当のアメリカだと痛感させられる。この国の豊かさの源泉は、間違いなくこの広大で豊饒な土地だ。食糧自給率130％はすごい。

翻って日本の食糧自給率は40％を切ったという。日本は江戸時代から教育レベルが高く勤勉、国土が狭い分（しかも7割以上は山林原野）経済・エネルギー効率は良い。だが如何せん天然資源に決定的に恵まれていないわけで、現在の生活水準を維持するためには、働き蜂を続けるしかないことは明らか。バカンスを欧米人並に取ろうとか、ワークライフバランスなんて議論は止めて、働くことが生活の糧だけでなく自己実現の場でもある、という日本人のスタイルこそ大事にすべきだろう。

食糧・エネルギー安保に関する意識の低さも心配せずにいられない今日この頃。これはロシア（モスクワ）、南ア（ヨハネスブルグ）、米国と3カ国通算10年強の海外生活の経験からの実感。

鈴木　茂（昭和54年卒）

# 駐在員チームで球蹴り

平成7法卒の重満紀章と申します。三井物産に勤務しており、米国シカゴに駐在して、二年半になります。普通の人にとって、ニューヨークやロスと違って、シカゴは馴染みの薄い街かもしれません。シカゴはミシガン湖の南西端に位置しており、東京からだと12時間ちょっと、ニューヨークには2時間半、ロスには4時間半の位置関係です。緯度は函館と同じくらいで、冬が寒く風が強いことで有名で、一冬に一度はマイナス20度を経験します。鼻毛が凍ります。その分、初夏の新緑の綺麗さは目を見張るものがあります。冬の間じっと寒さに耐えていた木々や芝生が、ひと雨ごとに緑になっていくのを見る楽しさは、冬の寒さの厳しさを補って余りあります。

シカゴにも如水会の支部があり、総勢12～13名ほどの小さな支部ですが、なんとそこには酉松会員が私を含めて4人もいます。鈴木茂さん（昭和54卒）、松村正俊さん（同57年）、宇津野智哉君（平成9年）です。当地にも社会人のアマチュアリーグがあり、日本人駐在員チームが2チーム所属し、宇津野君と私もそのうち一つに在籍しています。とはいえ、私はプレー中に、宇津野君に至ってはウォーミングアップのランニング中に肉離れをして以来、1シーズン以上サッカーから遠ざかっています。

現役の皆さん、若いことは素晴らしいことです。がんばってください。

重満　紀章（平成7年卒）

# 話題はやはり現役最終戦

大阪に単身赴任（新日鉄住金ステンレス㈱勤務）して6年になる。この間、現役チームの試合にはほとんど行けなかったが、昨年は大阪市大での三商大戦に加えて、御殿下グランドで行われたリーグ戦の東大戦（最終戦）の応援に行くことができた。人工芝となった立派なグランドでの最終戦は、夏の三商大戦の時よりもチーム力がはるかに向上している印象を持った。東大には是非とも勝って欲しいと念じながら試合を見ていた。残念ながら完敗、降格の確定という現実に、当事者の現役諸君と同様に、私自身も悔しい思いであった。

私自身の現役最後のリーグ最終戦（東京1部）も、この御殿下で東大を相手に戦った。試合終了間際の不可解なPK判定により引き分けに持ち込まれ、結果、東大との順位が入れ替わり関東大会への出場権を逃した。東京1部から関東2部への復帰を大いに期待されていたし、それができるチームであったと自負していたので、その悔しさは未だに忘れられない。我が同期も同じ気持ちだと思う。

二年前から大阪で卒業年次の近いメンバーによる一橋・東大・京大OBの合同忘年会（昭和55～57年卒中心）を行っている。昨年は一人の奥さんを含めて8人が集まった。一橋は同期の船倉君も参加した。それぞれに各企業で活躍しているメンバーであるが、真剣に勝負した経験を共有しているため、すぐに打ち解けてしまう。そして結局は、あの東大との最終戦の話題で盛り上がり、あの時誰がどうした、どう動いた、だからPKになったなどと30年近くも前の出来事について、敵味方の両面から時間を忘れて話し込みお酒を過ごしてしまうことになる。これからもこの話題で繰り返し盛り上がるだろう。

やはり東大とは互角以上の立場でいて欲しい。昨年は負けたが、一昨年のリーグ戦では東大に勝っている。応援には行けなかったが、そのニュースは東大OBからすぐに伝わった。

現役諸君も、そのことに注目しているOBが結構いることを知っておいてほしい。

日置　慶太（昭和56年卒）

# 宿敵との対決今も！

東大といえば、同じリーグで戦ってきた宿敵。

「あの時東大に勝っていれば・・・！」と何回思ったことか。

その東大の76年(昭和51年)卒業メンバーは毎年全国から集まってきて、東大職員と定期戦をやっていた。東大の幹事役池森さんから声がかかり、3チーム対応戦を始めたのが96年。

7年前からは「FC東京杯」を争うカップ戦に発展。最初の三年間は一橋が圧勝していたが、ここ数年は東大と東大職員に競り負けて二年連続最下位。

ま！いいか！！勝負は時の運、現役の時にもいろいろあったし・・・。

試合が終わると、3チームのメンバーに家族が加わり、懇親会場に集って和気藹々と酒を酌み交わす。なんという至福の時。現役当時はかろうじて名前を知っているだけだったのに、いまはすっかり仲間になり、サッカー談義に花開く。

この定期戦のために体調を整え、フットサルで体力をつけ、メンバーが足りないからといって後輩に声をかけ、仕事の仲間を誘い、そして息子・娘に助っ人を頼み試合に臨む。サッカーって不思議なもの。

なんでこんなに人を引きつけるのか？サッカーをとおしたコミュニケーションってなんて素晴らしいのか！卒業して30年が経って改めて認識させられた。

実はこのすばらしさを支えているのが池森さんなのだ。各チームとの連絡、日程の調整、場所取り、懇親会の準備、出欠確認・・・など、みんながこの試合を楽しめるように裏方で努力をしていてくれる。ありがとう！

少しでも池森さんにあやからなければ・・・。

07年11月24日参加者は福本、安部、古荘、山根、佐藤、栗原、栗原息子、浅井、小林、小林息子、深谷、小池、日置、倉崎、橋詰、（以上一橋OB）、吉田、花房（以上慶応からの助っ人）〈写真〉

山根　言一（昭和52年卒）

# サッカーならぬボクシング担当

平成18年組（一年留年で卒業は19年）の溝端清悟と申します。私は19年の春からTBSのスポーツ局で働いています。もちろんサッカーを担当したかったのですが、今まで担当したのは世界陸上とボクシング中継です。

昨年8月に大阪で開催された世界陸上は、一つのテレビ局が単独で主催するスポーツイベントとしては過去最大級の規模で、国内の放送はもちろん全世界にTBSが制作した映像が配信されるという超大型イベントです。実際の仕事というと、大会前は出場選手の資料作りやVTR作りのお手伝い、大会中はハンマー投げなどの投擲競技の記録付けという、ほんの些細な仕事に従事したに過ぎません。さらに休日返上、寝ることも間々ならない日々、一般的に言われているテレビ局の華やかなイメージとは程遠い生活をしていました。

そして今現在はボクシングを担当しています。TBSのボクシングというと皆さんご存知だと思いますが、一大騒動を巻き起こした亀田兄弟の試合中継を担当している部署です。私自身も異動早々騒動に巻き込まれ、毎日のように苦情電話を受け続ける日々が続いたこともありました。

入社して陸上にボクシングとあまり馴染みのないスポーツを担当してきました。しかし、世界一のスプリンターの走りを見たり、壮絶なKOシーンを目の当たりしたり、それぞれの競技の素晴らしさ、面白さを感じることができたのも確かです。それと同時にやはりどの競技よりもサッカーが面白いと強く思いました。陸上もボクシングもそれぞれの良さはありますが、やはりサッカーのような人と人との繋がりが美しいプレーを生むチームスポーツの方が面白い。そしてサッカーほど人々を、世界を熱狂させることができるスポーツはない、そう感じる今日この頃です。

色々ありましたが、私自身体調を崩すこともなく心身健康な日々を送っています。小平のグラウンドを訪れる機会には恵まれませんが、陰ながら一橋大学ア式蹴球部の活躍と西松会会員の皆様のご健勝をお祈りいたします。

溝端　清悟　（平成19年卒）

# 生涯現役を目指して

年の暮れ、胸ポケットのFMラジオで「第九」を聞きながら街中をランニングする。今年も怪我、トラブルなく無事サッカーができたことに安堵し、新しい年の初蹴りに思いを馳せる。私は中学からサッカーに親しんで50年、今郷里のシニアチーム「千葉四十雀クラブ」に属してサッカーを続けている。チームのメンバーは約百名、内訳は40歳代および50歳代各30名、60歳代40名で、最高齢は76歳。

シニアーサッカーは、試合時間40分（20分ハーフ）、試合中の交代自由、スライディングタックル・ショルダーチャージ禁止、等が基本ルールである（各年代共通）。年間のゲームスケジュールは、公式戦たる全国大会（厚生省ねんりんぴっく他）を始め、地域大会や地区毎のリーグ戦も組まれている。

年代やチームによっては随時、海外遠征も行っていて活躍の場は広い。また、65歳以上の元気なプレーヤーは「ロイヤル」としてリスペクトされ、若い女性チームとの試合も組まれる。このようにシニアーサッカーには、各人の意欲、体力、また時間的、経済的な余裕度に応じて、選択肢が広く、「体育会サッカー」と一味違う世界がある。

ところで千葉県は最近サッカーのレベルアップが目覚しく、埼玉、静岡に続く「新サッカー王国」と称される存在となっている。Jリーグに2チーム（柏レイソル&ジェフ千葉）を擁し、高校サッカーでも強豪「市船」を始めとして台頭著しい（今年は流経大柏が全国制覇を果たした）。「千葉四十雀」にも、元日本代表選手を始め、日本リーグで活躍した元プロ、関東大学リーグ1部で鳴らした選手など、名選手が名を連ねている。彼らは60歳になった今でも往時のプレーは健在で、目の覚めるような豪快なシュートや巧みなボール捌きなど、素人にはとてもマネのできないプレーを目の前で見せてくれる。

とはいっても、こちらにも見せ場はある。普段は地道な「汗かき役」を務めているが、過日、我ながら会心のミドルシュートを決めたことがあった。チームメイトも喝采。思わずガッツポーズをとった。驚いたのは相手チームの選手も駆け寄ってきて握手を求めてきたことだ。「敵ながら天晴れ」というわけだが、考えてみれば、日ごろからお互いに良いプレーをたたえあう土壌があった。こよなくサッカーを愛し、「生涯サッカー」を目指す同じ仲間として、年を取っても良いプレーをしたら我がことのように喜び、自分への励みにしているのだ。これがシニアーサッカーの良いところだ。これからも元気でお互いの励みになるプレーをし、生涯サッカーを目指していきたいと思う次第である。

現役の皆さん、昔とは比較にならないほどレベルアップし、力の拮抗した現在の学生サッカーにおいて、国立大学の立場で上位リーグへの復帰を目指すのは並大抵の努力ではできないと思います。しかしそれでもベストを尽くし、悔いのないサッカー生活を送っていただきたい。これによって培われた不屈の精神は、将来の人生に必ず生きると確信します。

斎藤　泰敏（昭和41年卒）

# フットサルの勧め

5年ほど前、大学の先輩から誘われて、初めてフットサルに参加致しました。フットサルとは、5人制のミニサッカーで昨年は日本にプロリーグも誕生しました。手軽さが受けて女性を含む若い世代に人気があります。やってみると、これが結構楽しく、体力的にもついていける事が分かりました。これをきっかけに、近所のフットサルコートでの〝個人フットサル〟（集まった人をその場でチーム分けし、休みを入れながらゲームを続けるスタイル）に通い始めました。昨年からは、会社の同僚、大学の先輩方とチームをつくり月に2、3回のペースで、会社の帰りに大井町駅前で楽しんでいます。平均年齢は50歳弱で常時部員募集中です。

フットサルの魅力は、まず何と言っても手軽なこと。やりたい時に、電話かメールで予約ができます。自宅、会社の近くのコートに通えば、時間も有効に使えます。また、スライディング禁止なので、安全です。料金も手頃で、レベルも自分で選べます。

忙しいサラリーマンや、サッカーをまた始めたい中高年に、フットサルはお勧めです。サッカーより手軽に始められ、安心して続けられます。首都圏であれば、自宅から車で30分圏にフットサルコートを見つけられると思います。どこもサイト上で、個人フットサル、主催トーナメント、各種スクールなどを案内しています。まずは、個人フットサルから始め、物足りなくなれば、チームに参加、自分でチーム作りへと進んでいくこともできます。

5年前のお誘いがなければ、今頃、ゴルフぐらいしかやっていないと思います。手軽なフットサルを通して、サッカーのある生活に戻り、時々11人制も楽しんでいます。ストレス解消、健康の維持、交友関係の広がり、深まりなど、その恩恵をフルに享受しています。もったいないと思い、今回ご紹介させて頂きました。

倉崎　嘉幸（昭和57年卒）

# 部誕生の地
## 石神井を訪れて

歌の文句ではないが、年の所為か「過去達は優しく睫に憩う、未来達は人待ち顔して微笑む」。その微笑に誘われ、ここ2、3年気が向くままに当ても目的もなく彷徨っていると、義父（故松本正雄元会長）の遺した多くの大学関係の資料に辿り着いたのであった。

「一橋五十年史」、「一橋籠城事件）」「辛酉籠城事件史」、「一橋新聞（縮刷版）」等々である。一方、サッカー関係では、東京商科大学蹴球部誌「蹴球」（創刊号）や「部誌」とか先の戦争時、戦地に赴いたサッカー部の人々からの書簡などである。

私は、数年前から如水会練馬支部と関係することになったことから「東京商科大学予科の精神と風土」の著者大沢俊夫氏の講演を聴く機会に恵まれ、「嘗ての旧制高校の教育や精神は、学制改革によって途切れてしまったが、唯一つ東京商科大学予科は、新制一橋大学に受け継がれている」（綱淵謙錠「空白の歴史」）の言葉に興味をそそられ「東京商科大学予科校舎旧跡」を訪ねてみたりもした。

まさに、その頃この石神井のグラウンドで我がサッカー部が誕生したのであった（前出「蹴球」創刊号参照）。その頃から育まれた精神的伝統が、応召中の大掛隆久氏の「独特の性格を持つチームの結成を…　無我の境地でボールを蹴られよ」（一橋新聞昭和15年3月10日号）と題した寄稿文に具現されている様に思えるのである。「入部者の経験なきを嘆ずるなかれ、…人の好技を学び自らのプレイを練る」とか「選手のサブに対する感謝がサブの心に通じ、…全部員の心が一つに凝り固まって十一人の肉体を借りて働く」とか。

既にボールを蹴ることも触ることもなくなった私であるが、四十有余年前、汗にまみれ、若さ溢れた時代の想念に接しさせて貰い感慨に堪えないのである。

今年の夏、当時の同級生9人と大学一年の時の夏合宿の地、水も飲まず地面に這いずり回った、想い出多かった湯桧曽を訪ねたが、四十年という時間はやはり短い様で長かったのであった。

石綿　浩之（昭和39年卒）

# プロ意識について

私がいま働く（朝日新聞宇都宮総局）栃木県には、栃木SCというJリーグを狙うチームがあります。昨シーズンJFL4位以内に入れば、J2加盟が認められましたが、残念ながら8位に終わりました。昨シーズン中、てこ入れのため柱谷幸一監督が就任しました。かつて日産自動車や日本代表のFWとして活躍。監督としても京都をJ2からJ1に上げた実績のある方です。

シーズン終盤、柱谷監督がよく漏らしたのは、プロアマ混成チームの限界についてでした。栃木SCの前身は栃木県教員チーム。元日本代表FWのプロ選手もいれば、地元高校の先生もいます。監督としては「俺たちはプロじゃないか！」と危機感をあおりたいのですが、違うので言えません。結局、フロントはシーズン終了後、監督の希望に応える形でアマ選手を解雇。来期は完全プロチームとしてJを目指すことになりました。

さて、この話は、一橋大学サッカー部とはなんなのだという問題にも通ずる気がします。おそらく、現役の皆さんは来期優勝と昇格を目標にし、異を唱える人もいないでしょう。でも、俺たちはプロだ！と主張する部員はあまりいないと思います。それではみんなで危機感をあおることにどんな意味があるのでしょうか。私自身振り返ると「意味はあった」と思う（と信じている）のですが、不真面目部員だったし、理由には触れないでおきます。

大半の方が、いずれ就職面接で「一生懸命やりました」とサッカーに触れるつもりではないでしょうか。でも一生懸命やったと語る人は珍しくありません。触れるならどれだけ説得力を持って語れるかがひとつの勝負のような気がします。ふって自分の話をしないのはずるいのでやはり少し触れますが。私は「スポーツにおける左利きの効用」を語りました。今思えば、だからなんだという話ですが、それなりに聞いて頂いた覚えがあります。

志村　亮（平成9年卒）

# 疾風に勁草を知る

「才能を褒めてはいけない。」

先日、山本昌邦氏（アテネオリンピック・サッカー日本代表元監督）の話をうかがう機会があり、そのときに心に残った言葉です。

試合中にある選手が左足で凄いシュートを突き刺したとします。そのときに周囲は「お前の左足、最高だなぁ」と言うのではなく、「今週一週間左足でシュートの練習をやってきた成果が出て良かったなぁ」という褒め方をすべきである、と。要は、前者のように才能を褒めた途端に、その選手は努力をしなくなってしまい、後者のように努力を褒めれば、その選手はさらに努力を積み重ね、どんどんと成長していくという話でした。

そのほかにもいろいろな面白い話がありましたが、突き詰めていくと、「サッカーは努力をした者が勝つ」ということが終始一貫したテーマだったように思います。

翻って、我々、一橋大学のサッカー部の状況はどうでしょうか？昨シーズン、数試合、リーグ戦の応援に行き、技術は昔に比べかなり向上していると感じました。ただし、一つひとつのキックの精度、動きの質、判断のスピードなど、相手のチームよりもほんの少しずつですが劣っていたように思います。この差を埋めていくには、やはり努力（＝練習）の継続しかないのではないか、と思います。

残念ながら昨年は降格という厳しい結果となりました。「疾風に勁草（けいそう）を知る」という言葉がありますが、強い風の吹くときこそ、真に強い草が分かるものだという意味だったと思います。降格という試練のときこそ本当の強さをはぐくむチャンスと捉え、他大学よりも沢山の努力を積み重ね頑張って欲しいと願っています。

ちなみに、努力の大切さは仕事や子育てにも通じるものがあり、最近、部下には「良くここまで考えた」と言い、我が子には「勉強した成果が出てよかったなぁ」と言うように心がけています。その成果は？これもその努力の継続の積み重ね、と思います。

樋口　哲司（昭和59年卒）

# 世紀の股抜きで突破

あの股抜きは生涯忘れないだろう。一九八〇年夏、酷暑の大阪体育大グランド。相手は当時関西の三強と言われた大体大だった。先発に抜てきした2年生のS君が右サイドでドリブルを始める。ディフェンスに入ったのは大学生ながら既に日本代表に選ばれていた西村昭宏選手。S君は見事に股抜きで突破したのだ。「幻か」。出場していた私ですら思わず見とれてしまった。

「サッカーの試合で一番悔しいのは？」と問われれば、開口一番「股を抜かれること」と答える。これほど滑稽な姿をさらし、屈辱的なことはないと思う。ところが、毎日のように放映される海外を含め（昔は三菱ダイヤモンドサッカーしかなかったのに…）試合の得点シーンをリプレイで見ると、DFの股を抜けたシュートが何と多いことか。ブロックできそうでできない、この悔しさがサッカーの醍醐味でもある。

西村さんは、後にヤンマー、日本代表の中心として活躍した名選手。現役を引退してからはユース日本代表やJリーグのセレッソ大阪の監督を歴任し、セ大阪のチーム統括部ゼネラルマネージャーを務めた。冒頭の股抜きに、わがチームが勢いづいたのは言うまでもない。後半30分まで2対2。残りの15分でガソリン切れを起こし、立て続けに3点を失って敗れたものの、紛れもなく強豪を本気にさせた。

この時の関西遠征は、無謀にも大体大のほか、大商大、大経大と、三強すべてと試合を組んだ。三試合とも判で押したように同じ展開だった。後半30分ごろまでは互角、最後は5対2で負けた。もちろん西村さんはじめ相手の選手は覚えていないだろうが、私たちあの時のメンバーにとって、思い出というよりも一つの「勲章」でもある。

着替えを終えると、小平の三倍ぐらいの広いグランドの外周を大体大の選手が懸命に走っていた。一橋相手にぶざまな試合をしたことへの罰走だった、と今でも確信している。

橋詰　邦弘（昭和56年卒）

# 今年も関西西松会

関西で西松会会員の集まりがある。発端は2年前の正月の関西如水会新年会の席上。松本由之さん（昭和26年卒）、篠宮清さん（27年卒）、田原洋二さん（28年卒）、中岡敬雄さん（31年卒）の面々で「関西でも西松会員が気楽に参加できる会をもったらどうか」という話になった。関西在住者は東京の総会にはなかなか出られないし、サッカーをさかなに飲む機会も少ない。

とんとんと話はまとまり、平成18年3月に関西文化サロン・梅田で「第1回西松会関西有志懇談会」が開かれた。卒業年次も昭和20年代から50年代卒までヴァライアティに富んだ会員が13人も出席、遥遥と山口県からは神代祥男さん（29年卒）にも駆けつけて頂いた。ワールドカップや母校の話題で盛りあがった。その年の秋には第2回目。東京から宮田幸三さん（29年卒）、名古屋から檜山博隆さん（33年卒）、それに平成でもとびきり若い世代が2人も参加した。

昨年は、4月と10月の2回で、母校の戦績や各自の健康問題、ゴールポスト・クロスバーの形状の昔と今との違いが話題になった。神代さんから競技規則上の詳細な説明を受け疑問は解けたが、断面の形が正方形から円形に、いつごろ、どうして変ったのか今ひとつはっきりしないままに終わっている。

これまでの出席者は上記の方以外に嶋田英司（32年卒）、村林昌二（40年卒）、天野四郎（44年卒）、柴田暁（46年卒）、松沼英昭（49年卒）、吉岡基夫（49年卒）、永田耕一（52年卒）、切畑年生（57年）卒、朝倉俊明（平成13年卒）、小林康彦（平成17年卒）の諸氏。

今年（第5回）は、前回の疑問の解決も含めて4月15日（火）午後6時から関西文化サロン梅田で、と決定済み。初めての方も奮って参加頂きます様お願い致します。

連絡先：amcamake@vanilla.ocn.ne.jp
電話・FAX：072（854）1590
佐竹　明和（昭和32年卒）

# 女性新入会員から

## 飲み会の席もばっちり

平成19年卒OGの越後屋麻澄です。現在社会人一年目でプラント業界（三井造船勤務）という男社会の中で奮闘しています。海外営業部に属しプラント事業全体について勉強中ですが、将来的には営業のサポートとして海外の契約や税務を担当することになると思います。

ようやく社会人生活にも慣れ始め、少しずつですが仕事もわかりはじめてきました。一発芸はしませんが、飲み会の席もバッチリこなしています。これもサッカー部で培った経験の賜物だと思います。最近は、話を聞いていないときにかぎって会議で話を振られ、慌てふためくということもありましたが、周りに助けられながら面白おかしく元気にやっています。二年目は後輩もできますので、一年目より余裕を持って対応できるよう励みたいと思っています。

秋季リーグですが、今年度も観に行きました。結果は残念なものでしたが、プレイヤー、マネージャー全員が一橋の勝利のために一つにまとまり、勝てば笑い喜び、負ければ泣き悔しがる、そのような姿を見ることができ、よかったなぁと思いました。今振り返ると、小平のグラウンドで雨や風、砂と戦いながら、たまに冗談を入れつつ、しかし秋季に向けて真剣に取り組んでいた日々は貴重でかけがえのないものだったと痛感します。そこで出会った仲間とは、お互い囲まれる環境は今後益々変わっていくと思いますが、その関係は変わらず大切にしていきたいと思っています。そういう意味でも、その繋がりを大切にする西松会は本当に有難いものだと感じます。

最後に、現役の方々にはくれぐれも怪我に気をつけ、サッカーとサッカー部を楽しんでいただき、そして来年度の秋季リーグでご活躍をされることを期待しています。

越後屋　麻澄（平成19年卒）

## 慣れぬ仕事に日々格闘

はじめまして。平成19年卒業、マネージャーだった水澤明希と申します。昨年から社会人一年生としてみずほ銀行銀座通支店で働いています。社会人となってから毎日慌しく、現役サッカー部の試合や練習をなかなか見に行くことができずにいます。

秋季リーグも最終戦しか見に行くことができませんでした。それでも現役がサッカーに夢中になって頑張っている姿を見ると、仕事で忙殺されている生活の中でも大学生活を思い返すことができ、思わず夢中になって応援していました。また新しい一年生が入部して頑張っている姿を見て、これからもますますサッカー部を盛り上げていってくれることを期待できました。

さて私事ですが、銀行に入行してからは慣れない仕事に日々格闘し、毎日が勉強です。私の支店の支店長が一橋大学出身で水泳部だったということもあり、たまに支店長から「サッカー部のOB会には出ているの？」と聞かれたり、「この前久しぶりに小平に行ったよ」というお話をして頂いたりしています。そうした何気ない会話の中でも同じ大学の体育会という共通のつながりを感じることができ、私自身少し誇りに思え、卒業してからもサッカー部でよかったなと改めて思っています。

銀行は入行前とはイメージが違うというところがありました。割とアナログなところがあるし、何より朝が早いです。夜どんなに遅くなっても朝5時半には起きて7時半には支店にいます。そして銀座という場所柄もあってか、飲み会等様々なところでお金を使うことがあり、なかなか貯金できません。しかしこれから段々仕事もハードになっていくと思いますので、慌てず自分なりのペースで要領をつかんで成長していきたいと思います。

またサッカー部のみんなとも会ってお互いの近況報告をして、励ましあいながら頑張っていきたいです。そして時間を見つけて、現役の試合や練習に足を運び、パワーをもらえたらなと思います。今年は降格という残念な結果に終わりましたが、来年は2部昇格を目指して頑張ってほしいと思います。

水澤　明希（平成19年卒）

## ゴルフ会にどうぞ

63年～66年（昭和38～41年）卒業の春季ゴルフ会の幹事を私が仰せつかり、今年は4月25日（金）に大宮ゴルフコースで開催することになった。この会も今回で4回目になる。私が幹事となったのは、前回のコンペで優勝したからだ。幹事である優勝者は次の会のゴルフ場選定の優先権を持つルールに則り、私が我家に近い大宮ゴルフコースを選んだのだ。

私たち同期の60年入学・サッカー部入部メンバー10人で90年代の中頃から、ゴルフをする会を定期的に催してきたが、これを06年に63年から66年卒業にひろげ、発展的拡大を図ったものである。4月25日の次回コンペでは最低3組、できうれば4組で開催できることを期待している。

サッカー部での厳しい練習を通して鍛えられた身体と常人には無い体力を誇った屈強な若者も、今や齢六十歳の半ば。みんなそれなりに、四十年の会社勤めのなかでの飲酒、過食、ストレス、運動不足、それに加齢も加わり、多かれ少なかれ身体のどこかに問題を抱えているのではなかろうか。私も自分でとりたてて自覚症状があるわけではないが、数年前から不整脈ありと云われ、医者から薬の処方を受けている身だ。不整脈があると心臓に血液の塊ができやすく、それが脳にとぶと脳梗塞を引き起こすそうな。適切な対応をしないとジャイアンツの長嶋さんみたいになると云うのが医者の診たてだった。

かくなるうえは、現役時代の生活習慣を改め、せめてゴルフができる程度の、健康と体力の維持につとめるしかない。その意味でゴルフのプレイができるかどうかが、私の健康を占うバロメーターと自戒している。

63年～66年卒業としているのは、たまたまその年代が中心となっているだけにつき、参加のご希望あれば下記にメール若しくは電話でご連絡を願います。

メールアドレス：gmpine@nifty.com
電話：048（726）4643
松島　源吉（昭和39年卒）

## 同期でW杯めぐり

我々（小林、松崎、馬場、高場、佐藤、高峯）は、3年生の時に関東リーグ2部から3部への降格、4年生の時必死に2部昇格を試みたが叶わず、悔しい思いをした仲間だ。それだけに卒業後も同体験意識が強く連絡を取り合い、事あるごとに集まり、飲み、語り合って来た。90年代からは皆、勤務も東京近辺となり、最近は私を始めリタイアー組が増え、その頻度も増してきている。

小平グラウンド

我が仲間と共にしたイベントを挙げると・・・

（1）ワールドカップ 観戦

①94年アメリカ大会（ブラジル優勝）＝小林、高峯がサンフランシスコ勤務の高場を訪ねて、コロンビア対スイス戦、カメルーン対ロシア戦を観戦。高場はその後、ブラジル対アメリカ戦を観戦。

②98年フランス大会（フランス優勝）＝小林が日本対ジャマイカ戦観戦

③02年日本・韓国大会（ブラジル優勝）＝仲間それぞれが手にしたチケットで共に数試合を観戦

④06年ドイツ大会（イタリア優勝）＝高場、小林、高峯の3名が、ベスト16が決まった後、ドイツに飛び、ベルリンでドイツ対アルゼンチン戦（PK戦でドイツ勝利）、ベルリンの街でドイツの連中とビールをがぶ飲み。その後、ミュンヘンで美術館巡り、ビアホール巡りはもとより、ドイツ最高峰ツークシュビッツ登山もする。ミュンヘンから汽車で国境を越え、チェコへ、プラハでプラハ城、市内観光、ピルゼンでビール工場見学。ドイツに戻り、バーデンバーデンでは温泉に浸り、レンタカーで黒い森ドライブ。3位決定戦、決勝戦はパブリックビューイングで現地の人々とビールを飲みながら観戦。イタリア優勝を確認してフランクフルトから帰国。（13日間の旅）

（2）トヨタカップ観戦（高場、小林、馬場、松崎、高峯）

①05年（サンパウロ優勝）＝準決勝、3位決定戦、優勝戦のサンパウロ対リバプールと3試合を観戦

②06年（インテルナショナル優勝）＝準決勝、バルセロナ対クラブアメリカ戦観戦（ロナウジーニョ、デコの個人技に驚愕）

③07年（ACミラン優勝）＝ACミラン対浦和戦を観戦（格の違いを再確認）

（3）日本の世界遺産（自然）巡り（松崎、小林、馬場、高場、高峯）

①05年6月：白神山地巡り

②07年10月末：屋久島（縄文杉・島内巡り）

③今年も高場を中心に検討中・・・知床か？・・・

（4）飲み・語り合い（3か月に1回以上）

新年会、花見、暑気払い、忘年会、他にスポーツカフェで日本代表の試合を観戦しながら・・と、何かと集まって飲み・語り合っております。佐藤は大阪でなかなか一緒になれないのが残念。

（5）私自身のサッカープレーの状況は、二年半程前にプレー中に太腿前面の筋肉断絶、治療が長引き、昨年初には体調を崩して入院、プレー再開は昨年夏から。老年サッカーは身体を騙し騙しやっておりますが、とても「生涯現役プレーヤー」なんて・・・外岡先輩、奥村先輩、今村先輩がグランドにいらっしゃる姿、プレーには感嘆しております！

同期に限らず、サッカーの仲間との語らいは楽しいものですね。海外の旅でも大いなる話題なりますし・・・。

高峯　文世（昭和43年卒）

# 走りながら考えるプレーを

過日特にこれと言う宛もなくテレビのチャンネルを回していたら、小学生のサッカー教室を放映していた。それは、DFを背にしたFWがゴロパスを受け、DFの身体を抑えながらトラップして前を向き、DFをかわしてドリブルシュートをする。一方DFは出来ればゴロパスをカット、カットできない場合は前を向かせない、前を向かれたらワンサイドカットでFWの動きを制約し、抜かれないようにする練習であった。

私が主将のとき立川高校の松浦先生（東京文理大卒。昭和15年幻の東京オリンピックの代表選手）の御指導を受けていたが、当時CFの橋本君が練習の都度前述の練習を課せられたのを思い出し非常に懐かしかった。

野球と違ってサッカーはボールを保持しない限り攻撃することが出来ない。このことからサッカーはボールを奪いあう競技と言うことも出来る。従ってボールコントロール練習は相手無しのストップ、ドリブル、キックだけで無く、相手と競合いながらこれ等を行う必要がある。

現役諸君の練習で相手と競合いながらのボールコントロールを行っているだろうか？私が見た練習では行われていなかった。また試合においてもしっかりしたワンサイドカット、タックルを見たことが無い。練習でしていないプレーが試合で出来る筈はない。

私の現役時代にシュート板が必要と言う要望を受け、先輩が通常より寄付金を増額し、其のお金でシュート板を作ることが出来た。非常に嬉しかった。先輩に感謝しつつ皆多いに活用したものだった。現在のシュート板は学校で設置したものであるが、前面に雑草が生えている状態を見ると活用していないのではないだろうか。

サッカーは広いグラウンドを休み無く走り回る競技故、千変万化する状況下に於いて自分で適格な判断をしてプレーするスポーツである。「走りながら考える」事が不可欠で、其の為には普遍的なセオリーを身に着けておく事が極めて重要である。普遍的なセオリーと言ってもボールコントロールから戦術まで数多くある。念の為ごく簡単なものを二、三挙げると

空中のボールは空中で処理する。バウンドさせてはいけない。

自陣深い位置で外から内へ緩いパスをしてはいけない。

シュートレンジで蹴り足の変更、体勢の修正をすると相手DFの防御態勢に余裕を与える事になる。自分の事だけ考えず相手の事も考える。

ところで利害得失を考えず純粋に自己の目標を追求できるのは一生のうちで学生時代に限られる。従って諸君は今その貴重な時を無にすることなく、サッカーと言う競技の本質を真剣に考え、試合に勝つ為にはどの様なプレー、どの様な練習が必要か研究し実行して貰いたい。

高田　勝巳（昭和30年卒）

リーグ戦　対東大戦（御殿下グラウンド）

# わが同期会は花盛り

同期の仲間と夫婦揃っての新年会と、年に1回の1泊旅行を続けている。1、2年で退部して行った仲間も含め、今までに伊香保、那須、安曇野、白神山地、ボクの生家の信州駒ヶ根などに行った。2日目はゴルフ組と観光組に分れるが「晴れ男」大橋のお蔭でゴルフが流れたことはない。幹事は持ち回り、近頃は有縁の地めぐりが続いている。四年生のとき夏合宿をした北軽井沢には石綿の別荘もあるため2回ほど行った。斎藤が花巻市の大学の教授も務め、ひと頃中村も北上市で会社の社長をしていたため北上・遠野に遊び、地元財界でがんばっている永山を訪ねて鹿児島・知覧・屋久島に行ったこともある。

昨年は一年生のとき夏の合宿をした湯檜曽に行った。（夫婦5組、単独参加4人計14名）。かつての宿やグラウンドの面影を求めて歩いたが、何しろ昭和35年、実に47年も前のことだから湯檜曽駅は変わり、宿も建替えられた上、お互い忘却という老人力がついてきている。結局よくわからず仕舞いで、大穴スキー場下のグランドが「どうやらここらしい」と納得することにした。夜は「水上高原プリンスホテル」に泊まり、回顧談に花が咲いた。

清水トンネル手前の山間の駅の長い階段を下って「もちや旅館」に投宿、2階大広間に雑魚寝して程近い学校のグラウンドに通ったが、そのグランドの片隅に用水が流れていたこと、筋肉痛のあまり階段を這って上り下りしたこと、一年生はボール係で、朝夕ボールの世話をしながら「船頭小唄」を口ずさんだこと、風呂場で就職の話をしていた四年生がえらく「おっさん」に見えたこと等々、各自の断片的な思い出は尽きない。

みなそれなりに体のどこかに不調を抱える歳となったが、血気盛んな連中はボールを小さなボールに代えて、年に3回ほどのコンペで英国の羊飼いの遊びに興じているらしい。

新年会は例年池田のご尽力で六本木の日鉱クラブに集う。今年も楽しみだ。

森岡　義久（昭和39年卒）

# 不覚の失神退場

その時、目の前が真白になった。その後の記憶はない。気が付いた時には、東大病院の救急病棟の中だった。昭和52年6月、国公立大会の決勝が東大との間で、東大御殿下グラウンドで行われた。雨中の泥んこのピッチコンディションで、前半か後半か定かではないが、相手ゴールキーパーのパントキックしたボールを中盤でヘディング。水を含み普段の2倍位重くなったボールに、当り所が悪かったのか、失神してしまい不覚の途中退場となり、タンカで直ぐ隣の東大病院に運ばれたという次第である。因みに、試合結果は1対3で負けたということを後で聞いた。

何故この話をしたかというと、毎年東大OBとの定期戦をやっていて、試合後の宴会の時に、当時一年生だった日置君が「看護婦さんが、泥だらけの小林さんをびっくりして見ていた」と面白可笑しく、毎年、話すからである。

当時のことを思い出そうと「一橋大学ア式蹴球部60年史」を見返してみた。沸々と甦ってきた。わざわざ一橋に入ってまで、サッカーだけやって何の意味があるのかとも思っていた。しかし、好きだからついついやってしまった。4年生の時はグラウンド・マネージャーになった。前年、関東2部から落ちて、東京1部で戦った。そこでも落ちた。泣いた。勝ったことより負けたことの方が多かった。はっきり言ってしんどいことばかりだった。

2年連続で落ちて会わせる顔はないのだが、事実として残ることは、掛け値無しに、仲間と共に必死でやったことかなと思う。余り美化するつもりはないのだが、学校を出てから30年、名古屋の地で思うに、必死で戦うことが人生には必要なのかなと思う。（いまだに、サッカーの試合では、どんな試合でもついつい本気になってしまう今日この頃である。）

小林　治（昭和53年卒）

# Jリーグの基盤強化を目指して

皆さんはJリーグ選手協会（JPFA：J.League Pro-Footballers Association）という組織をご存知でしょうか？ 多くの方はプロ野球選手会のことはご存知だと思いますが、サッカーの方はあまりご存知ないと思います。JPFAもプロ野球選手会と同様にプロサッカー選手による労働組合的な組織としてJリーグ発足三年後の96年に設立され、現在は約九百人の日本人Jリーガーが全員加入しております。今回はこの協会の活動について少しご紹介させていただきます。

協会の活動理念はプロサッカー選手の地位向上、サッカーの普及・振興、社会貢献活動の三本柱です。

まだまだ日本のプロサッカー選手は同世代のサラリーマンと比べても全般的には報酬その他の面で厳しい環境にあるのが実情です。まず、第一には選手の労働環境を向上させなければいけませんが、一方でクラブ経営も一部のビッグクラブを除いて非常に厳しく、このバランスを考えつつ少しでも選手の待遇を引上げていきたいと考えています。報酬以外の点では、他のプロスポーツに先駆けて、引退後のケアを行うシステムを早期に立ち上げており、また最近のテーマでは選手の移籍の自由化に取り組んでいます。

サッカーの普及活動や社会貢献の面では、年に数回全国各地で現役選手によるサッカースクールの開催や、各クラブの選手会による地域貢献活動、大きな災害があればチャリティ運動などを行っています。

日本のプロサッカー界は歴史も浅く、選手の立場も強いものではありません。しかし、子供達に大きな夢を与えられるように、今は第4代の藤田俊哉選手会長の下で日々努力していますので、皆様暖かいご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

公式ホームページ：

http://j-leaguers.net/

加藤　冨朗（昭和52年卒）

（Jリーグ選手協会　事務局長）

## 訃報

青木 育郎（あおき・いくろう）さんが平成19年12月28日に死去されました。86歳でした。東京府立1中から昭和13年に予科入学、19年9月卒業。その後三菱商事に入り取締役。

最近でも酉松会総会にはほとんど毎回顔を出され、絶えることのない微笑が印象的でした。

## 編集後記

とにかくコミュニケーションの輪を広げたいという土井会長の思いに急き立てられて、方針もなく突き進んだのが運の尽き。何度も座礁、転覆しかけながらようやくたどり着いたというのが実感です。

行き当たりばったりにメールを打ち、手紙を出し、返事を待つ日々。そのうちに海外から大阪から、女性の新会員から、そして年代を超えて到着する返信に、サッカーを通したつながりの強さを思い知らされました。

昨シーズンは残念な結果に終わりました。現役の文章にも悔しさがあふれています。ただ、平成世代を中心に小平に応援に駆けつける会員が増えているそうです。この新聞が現役と会員、会員間の交流を一層広げ、密にしていくのにいささかでも役に立てばと思います。

相良　保彦（昭和41年卒）